双葉町復興町民委員会　町民コミュニティ部会
ワークショップ　第５回　報告書

■**日時**　　平成 27 年 12 月 3 日(木)　13：00～15：30
■**場所**　　双葉町役場いわき事務所　2 階大会議室
■**参加者**　　別紙座席表のとおり

■**テーマ**　　「部会最終報告書の取りまとめ」

■**部会の流れ**
・部会最終報告書（案）の説明
・意見交換
・決定
・取りまとめを終えて（感想）
・全体討議

■報告書に関する指摘事項等

Ⅰ．部会の目的

- 「次のとおり報告いたします」（P1、11 行目）の後に、「今後この取り組みを検証する部会の継続を要求します」と記載するなど、PDCA に関する文章を追加してはどうか。
- （事務局提案）その趣旨の文章をこの部会だけ目的のところに加えるのは、他の部会の関係もあるので、部会長から本委員会で直接提案いただくか、本報告書のあとがきに記載する方法があるが、いかがか。
  →「今後この取り組みを検証する部会の継続を要求します」と部会長が委員会において口頭で提案する。

Ⅲ．検討の対象となるテーマ

- 「教育環境の確保に向けた取組」（P4、左列の□の４つ目・P13、19 行目）とあるが、なんの教育環境のことか。
  →記載内容は、子どもの教育環境のことであるので、「子どもの教育環境の確保に向けた取組」と修正する。

- （担当課提案）「①町立学校（幼稚園、小学校、中学校）の再開」（P4、右列の□の４つ目）を「①町立学校（幼稚園、小学校、中学校）の充実」としたらどうか。
  →修正する。

- （担当課提案）「③子どもたちの「つどいの場」の提供（集まれ！ふたばっ子）」（P4、右列の□の４つ目）を「③子どもたちの「つどいの場」の充実（集まれ！ふたばっ子等）」としたらどうか。
  →修正する。

Ⅳ．基本的な方向性

１．町民の交流機会の確保

- 「都会」（P6、2 行目）については、グループワーク時の趣旨が伝わるように言い換えた方がよい。（他道府県へ修正してはどうか）
- （担当課提案）東京都については、規約における自治会の定義には含まれないので「都」も含めるべきではないか。
  →「他都道府県」と修正する。

- 「自治会運営の役割については、全員で分担するのがよい。自治会は、会員全員で作り上げるものだ」という趣旨を追加したほうがよい。（P6、26 行目以降「行政区・自治会組織のあり方検討」）

- 「あわせて、高齢者等の交通弱者を中心に、集会所などの交流施設までの移動手段の確保が課題となっているため、避難先自治体と連携しながら検討していく必要がある」(P8､26 行目以降)については、地域の広さがハードルになっているということを加えた方が良い。
  →「あわせて、高齢者等の交通弱者を中心に、集会所などの交流施設までの移動手段の確保が課題となっている。とりわけ、いわき市などのエリアの広い自治体の場合は、避難先自治体と連携しながら検討していく必要がある」という趣旨に修正する。

３．町からの情報提供の充実・円滑化

- 「対面で情報提供を行う機会を増やし」(P10、3 行目）とあるが、きちんと具体名を出すべきだ。
  →「対面で情報提供を行う機会（町政懇談会等）を増やし」と修正する。

４．双葉町の歴史・伝統・文化の記録と伝承

- 「「せんだん太鼓」を中心に、「山田のじゃんがら念仏踊り」、「女宝財（おんなほうさい）踊り」、「壁塗り甚句」等」(P10、22 行目）に「神楽」を加えるべきだ。
- これらの郷土芸能をどのような順で記載するべきか。
  →「「神楽」、「せんだん太鼓」、「山田のじゃんがら念仏踊り」、「女宝財（おんなほうさい）踊り」、「壁塗り甚句」等」と修正する。

５．避難先住民等との交流促進

- 「情報交換と連携強化」(P12、17 行目）についても、具体的には「自治会同士の交流会」のことである。「交流会を促進してほしい」という趣旨が明確になるようにしてほしい。
- （担当課提案)「いわきの双葉自治会」と「郡山の双葉自治会」(P12、16 行目）と具体例が出ているが、ほかにも実施されている例もあるので、言い換えたほうがよいのではないか。
  →「「いわきの双葉自治会」と「郡山の双葉自治会」のような」を削除し、「避難先自治会同士の交流会等を通じて、情報交換と連協強化をさらに進めるべきだ」といった趣旨の文章に修正する。文章は事務局と調整する。

６．震災・事故の教訓の記録と伝承

- 「本事項については、今回の部会では議論を行わなかった」(P13、18 行目）については、やはり何か加えたほうがよいのではないか。
  →「筑波大学が震災の記録や情報を整理してホームページで提供している」や「新聞記事や町民の記録を収集整理する」などを趣旨

とした文章を、事務局と調整する。

７．教育環境の確保（P13）

- 「教育環境の確保に向けた取組」（P4、左列の□の４つ目・P13、19行目）とあるが、なんの教育環境のことか。（再掲）
  →「子どもの教育環境の確保に向けた取組」と修正する。（再掲）

◇全体を通して

- 「自治会」という単語は適切なのか。双葉町に認められた自治会のみの話のような印象を与えないか。
- （事務局提案）文章としては、狭義（双葉町役場が定めた定義）の自治会でなく、広義（一般的な意味）の自治会として読んでもらえると考えている。また、正確に書こうとすると、文章が長くなる。このままでいかがか。
  →修正なしでよい。

■部会員等の感想

最後に５回の部会を振り返って感想を述べた。

（部会員 1）

ワークショップのサポーターの皆さんが双葉町内を視察されて、本当に双葉町のことを思ってくれていると実感しました。この計画を推進して、避難先で町民が安心できる生活ができるよう環境づくりをお願いしたいと思います。

（部会員 2）

現在、双葉町に帰れるだろうかという大きな問題を抱えています。しかし、今回の部会で明るい気持ちになり、着実に皆さんと一歩を踏み出せるという気持ちが湧いてきました。皆さんと一緒に力をあわせて、前に進んでいきたいと思います。

（部会員 3）

今後、補助等がなくなると、県外に避難した人が住民票を異動する場合が出てきます。その場合でも、町民として引き続き支援してほしいと思います。また、地域づくりは単独の町村だけではなくて、双葉郡として合併まで含めた協議に取り組む必要があると思います。

（部会員 4）
　支援活動に従事する人の生活の支援が必要であると思います。ＮＰＯを作る手続きは勉強すればできるが、ただ単にＮＰＯを作るだけではなく、資金など運営することが難しいので、活動する人が生活できる現実味のある支援を行政に考えてほしいと思います。

（部会員 5）
　復興公営住宅にいると守られているという感じがします。4 町村の皆さんと交流することができ、近くにいわき市の災害公営住宅もできているので、これからも楽しくやっていきたいと思います。

（部会員 6）
　長期的な課題よりは、今は何をすべきかを考えています。現在のコミュニティをどう確立していくかが重要であると思います。繋がりというものは、会って対面で笑ったり悲しんだりするようなことなので、絵に描いた餅にならないようなコミュニティを立ち上げていこうと思います。

（部会員 7）
　首都圏に避難していますが、避難先の自治会で班長をやることになり、防災訓練や見回り隊などのいろいろな活動に参加しています。できる限り双葉町の復興を支援しながらも、お世話になっている避難先でも頑張っていきたいと思います。

（部会員 8）
　双葉町元気サポーターの人材育成と、それらを支援する中間支援型ＮＰＯの設立について提案がありました。若い人が活動できるよう生活を支援しながら、職業として本気で取り組んでもらえるような仕組みをつくることに期待しています。

（部会員 9）
皆さんの話を聞いて勉強になりました。今後もよろしくお願いします。

（部会員 10）
　この報告書は、皆さんの声がよく反映されていたと思います。中間貯蔵施設の区域内の住民に対して、双葉町への帰属意識が薄れていかないようにする必要があると思います。その人たちの気持ちに配慮すれば、永遠に故郷はなくならないと認識してもらえると思います。

（部会員 11）
　友達に、「双葉町ってもうないだろう」「成り立ってないだろう」「実態がないだろう」と言われました。「そうです」としか言いようがありません。一方で、「いつまで甘えているんだ」とも言われました。皆で本気になってやるしかないと思います。

（部会員 12）
　仲間は高齢者が多いので、これからの高齢者福祉、特に老人ホームの心配をしているようです。また、ある地区では健康診断を寒い時期にやるので、高齢者はなかなか採血できない人や血圧が上がってしまう人もいるので、細かな点について考えていただきたい。

（部会員 13）
　報告書はうまく取りまとめていると思います。例えば多様なコミュニティの形成についてですが、女性と比較して男性が定期的に参加できるコミュニティがありません。１回の宴席で距離が縮まることもあるので、男性向けのコミュニティを作ると良いと思います。

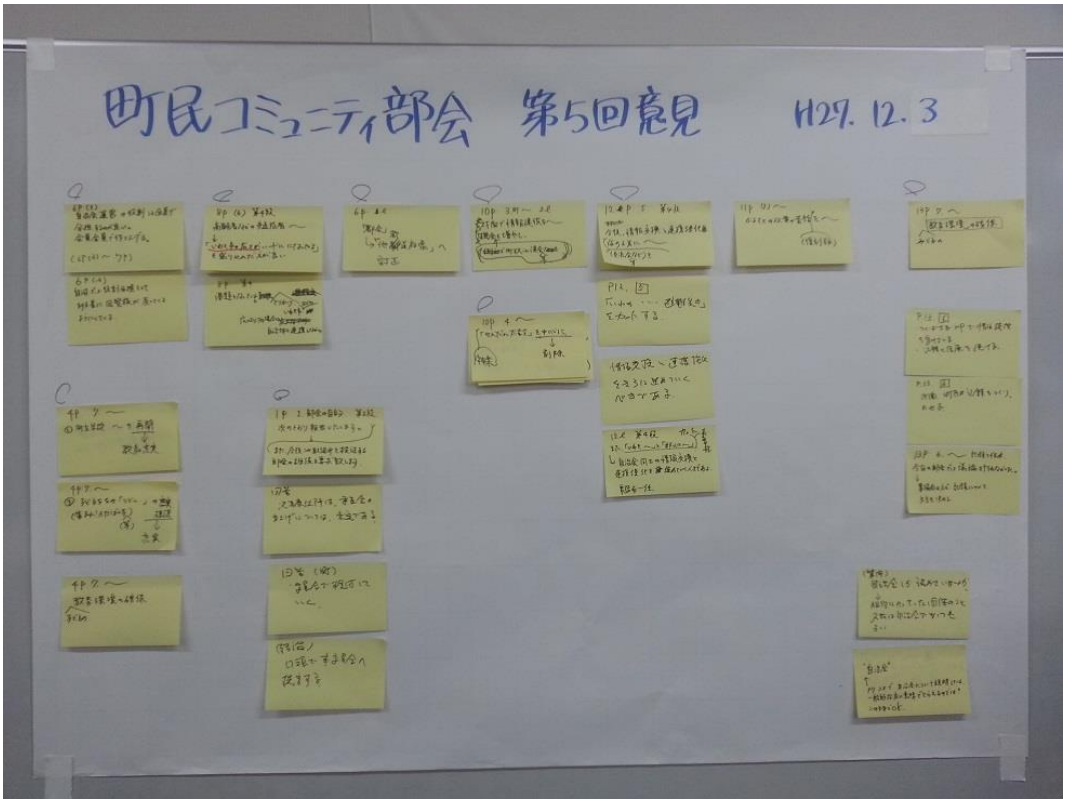
（部会員 14）
　双葉町の隣組や大字単位でのコミュニティよりも、避難先で双葉の人たちと連絡を取り合い情報共有して絆を深めることや、避難先の皆さんと交流してコミュニティづくりをしながら毎日を悔いのない楽しい生活をすることが一番だと思います。それには、自治会の役割がますます重要になってきます。快適な「リトルふたば」づくりを目指したいと思います。

（部会員 15）
　仕事や働いている親に代わり孫の世話をするために時間が取れず、参加回数が少なく申し訳ありませんでした。皆さんが抱える個々の問題や願いは人それぞれにあり、部会で出された問題が一つでも多く解決されることを願っています。

ワークショップの様子

ワークショップの様子

ワークショップの成果



◇専門家からのコメント

■桶谷先生

今日の会議を聞いて 2 つほど頭に残った言葉がある。いろんな人が集まってくると、ルールと役割分担ができるようになる。次に、グループでの情報共有が大切になってくる。

日頃、環境コミュニケーションをテーマに仕事をしているが、いろんな利害を持った方を集めて会議をしている。今回は利害関係ではなく、様々な立場や価値観の人が集まって議論することとなったので、部会員の間にはギャップがあったと思う。そのため、どこでその折り合いをつけるかということが大切である。まずは、折り合いがついたところから着手し、一歩踏み出すということが大切である。

また、情報の共有が大切である。ＳＮＳやタブレットの話が出ているが、皆さんの実情に合わせて工夫していくことが必要である。上手にツールを活用し、垣根がなくなるように情報の共有をしていただければと思う。

■中村先生

「若者等」のキーワードが出ていた。若者が参加せず、コミュニティの高齢化と固定化が進みつつある話が出た。

人々の繋がりができないということはどういうことか。繋がりを持ちたい人もいれば、持ちたくないという人もいる。求める人、求めない人、求めざるを得ない人の 3 種類あると思う。求めない人はなぜ求めないのか。若い人は、趣味や関心事には繋がりたい。そのため、同じ街に住んでいるという地縁があっても、趣味が合うからという理由の方が優先されるということもある。

新しい自治会の在り方、役割を示唆していると思う。自治会は、近くに住んで集まりやすい器である。お茶飲み会や発表会などで、いろんな特技、趣味、話題を披露するようなテーマコミュニティとしての自治会がありうるのではないか。

役場が認める自治会、サークル的な自治会、テーマコミュニティという形態でいったん整理をしてみる。次に、施設を作るのは役場、利用するのは町民なので、一緒に検討して形にしていくのが大切だと思う。

事業計画への反映ということだが、役場が 3 年かけて何をやるかというのが事業計画である。一方で、国や県がやるべき事業に関しては、国や県の責任者に対してきちんと要望していく必要がある。

町民も主体性をもって、町民が活き活きと復興を実現化していくことが大切である。事業計画だけではなく、町民主体の動きが復興に反映されていくことが重要である。

◇学識経験者　間野先生からの講評

コミュニティをテーマにして検討するのは、災害が起こったところのみでなく、全国各地で注目している状況である。しかし、原発事故で全員避難生活をしているという特殊な状況の中では、コミュニティの重さが違う。特に、原発被災地におけるコミュニティの在り方については、強調する必要がある。

まず、避難所があり、次に仮設住宅になり、未だに仮設住宅の生活が続いている。そこから、復興公営住宅への入居や自分で家を建てるということが起こりつつある。しかし、復興公営住宅や自分で建てた家に住んでも、「避難」という状況の人は大勢おり、今後も避難生活が続く人という人は大半を占める。

これまで作った絆や繋がりやコミュニティというものとは違う形で、新しい課題がたくさん出てくる。この報告書は、基本的に今の状況で何が必要かというものが取りまとめられている。しかし、ここに記載されていることがしっかり実行されれば、新しい状況（仮設住宅が無くなる・復興公営住宅が建設・自ら自宅を建設）でも、絆を繋ぎコミュニティを維持することや新たに形成していくことも、続けていけると思う。

役場や避難住民や支援する団体は、この報告書に具体的に提案されているものは実行してほしい。また、課題として出されているもたくさんあるので、早急に次の検討を続けていき、具体的な施策取組に繋げてもらいたい。

◇金子先生からの最後のあいさつ

５回の長期にわたってご議論いただいて感謝申し上げる。

このサポーターの若いスタッフの力を借りて、可能な限り皆さんと明るく楽しい議論ができるように努めてきた。今年は課題を挙げるだけでなく、どのように解決していくかにも踏み込んできたと思う。

一方で、若い人のアイデアや新しい見方を入れるということについては、必ずしも消化できなかったと思う。次を見据えるという点では宿題である。ヒントとしては、会議を楽しく創造的・意欲的にやろうと思う人が集まって運営していくといいと思う。

そのためには、このサポーターのような人材を、地元の若者から育てる必要がある。そして自分たちでいい会議を作っていくことである。
皆さまが安心して暮らせることを祈っています。

◇双葉町　半澤副町長からの最後のあいさつ

全五回の真摯なご議論について感謝申し上げる。

今日の午前中の高齢者等福祉部会と町民コミュニティ部会の議論が非常に似通っているという部分があった。二つの取組やご意見をうまく組み合わせて、取り入れていきたい。

今日の最後の意見の中で、賠償・中間貯蔵施設・高速道路の無料化といった議論も出された。また、町内に町民がいないなかで、どうやって町を維持

するのかという根本的なお話もあった。コミュニティを維持する大前提として、町役場としての取組をしっかりやるとお誓いする。その上で、コミュニティを維持するための今回の提案をしっかりと実行していきたい。

第5回双葉町復興町民委員会　町民コミュニティ部会座席表

（敬称略）

資料2

1　日時　平成27年12月3日（木）13：00～15：00

2　場所　双葉町役場いわき事務所　2階大会議室

荷物置き場

パネル

山本　眞理子
松木　秀男
舘林　孝男

白岩　寿夫
渡邉　浩二
高田　秀文
林　良子
岡村　隆夫
（財）電源地域振興センター
客員研究員
桶谷　治寛

笠原　悦夫
大橋　庸一
佐々木　六郎
行徳　幸子
梅田　壽嘉
（財）電源地域振興センター
客員研究員
中村　元則

ファシリテーター

飲み物コーナー

アドバイザー

県立広島大学名誉教授
福島大学うつくしまふくしま
未来支援センター特任研究員
間野　博

オブザーバー

福島県生活拠点課
鴛海　潔　主任主査

福島県避難地域復興課
八巻　正則　主任主査

副町長
半澤　浩司

教育長
半谷　淳

教育総務課長
今泉　祐一

総務課総括参事
武内　裕美

秘書広報課
主幹兼課長補佐兼秘書広報係長
板倉　幸美

生活支援課長
志賀　睦

事務局

事務局（復興推進課）

（財）電源地域振興センター
鈴木　薫
米山　治介
松本　奈々
橋本　靖治
細澤　界
網蔵　孝紀
平岩　邦弘

受付

報道関係者傍聴席